

よこぼり ゆうた
横堀 雄太

国際医療協力局
運営企画部
保健医療協力課/保健医療開発課併任
医師



★略 歴

2004年	京都大学医学部卒
2004年～2009年	国立国際医療研究センター小児科
2009年～2012年	北海道社会保険病院 小児科
2012年～2013年	ジョンスホプキンス大学公衆衛生大学院
2013年～	国立国際医療研究センター 国際医療協力局
2015年～2018年	ザンビア共和国UHC達成のための 基礎的保健サービスマネジメント強化プロジェクト長期専門家
2019年～2020年	厚労省大臣官房国際課課長補佐
2020年～	現職

★主なプロジェクト

- ・ザンビア共和国UHC達成のための基礎的保健サービスマネジメント強化プロジェクト
- ・厚労省大臣官房国際課課長補佐

★現在の主な担当業務

- ・保健医療開発課/保健医療協力課
- ・疾病対策チーム
- ・国際保健関係研究活動、WHO関連政策支援

横堀さんが、医師、国際協力を目指したきっかけを教えてください。

高校時代、私は宇宙飛行士になりたいと思っており、最初の大学は理学部に入りました。高校で量子力学を学んで、世界の成り立ちやマクロ・ミクロのつながりを解明してゆく宇宙物理が面白いと思ったからです。しかし、大学へ入学してからは、文化人類学や哲学を勉強して、机上の数式だけでなく、実社会における人間のつながりにも興味を持ち始めました。

そんな中、当時住んでいた寮に理学部から医学部へ転部した先輩がおり、酒を飲んで「医学は人間どうしのつながりを守る仕事でとてもやりがいがある」という話を毎晩のように聞かされるうちに、私も医学に興味をわき、その後医学部への転部を決意しました。

医学部転部後は、様々な文化や価値観の人々の営みを実際に体験したいと思い、バックパッカーとして世界中を旅行しましたが、その道中、インドやカンボジアで活動するNGOと出会い、彼らのボランティア活動へ参加するようになりました。ボランティア活動では、現地の人々の生活をより身近に感じ、彼らの豊かな生き方から多くの学びがありました。

しかし一方で、重症の患者が診療に来ては薬がなく検査もできず、生きるために最低限必要なサービスも受けられない現実を目のあたりにして愕然としました。特に、カンボジアで実際に目の前で栄養失調の子供が亡くなったことは今でも忘れられません。

将来このような不当な格差を少しでも是正できる仕事をしたい。このような思いから国際協力の分野で働くことが夢となりました（もっとも宇宙飛行士の夢はまだあきらめていませんが）。



バックパッカー時代@アメリカ



ボランティア時代@カンボジア

国際医療協力局に入職する前のキャリアを教えてください。

大学卒業後、国立国際医療研究センター病院において研修医として2年間、小児科レジデントとして3年間勤務しました。その間、奄美大島のハンセン病療養所へ短期出向したことでハンセン病に興味を持ち、国際医療協力局のレジデント研修プログラムの一環でネパールのハンセン病病院で勤務する等、国際保健に関わる活動をしました。

レジデント終了後は、出身の北海道で3年間小児科として勤務し、地域医療としての一般小児から小児循環器、NICUまで幅広い患者を担当しました。その間、2011年の東北大震災では、AMDAによる大槌町のボランティアに参加し、震災で取り残された障害者(児)の支援等に関わりました。その後、2013年から1年間アメリカへ留学し、ジョンズホプキンス公衆衛生学学院で公衆衛生学修士を取得し、主に小児保健・災害や紛争医療、疫学統計を学びました。帰国後、国際医療協力局へ入職しました。



レジデント時代@ネパール



留学時代@アメリカ

国際医療協力局に入職したきっかけ、理由、決め手はなんだったんですか。

アメリカへ留学中は、国際機関にも興味があり、世界銀行や国連、ユニセフといったアメリカが本部の国際機関で研修をしましたが、成果主義の文化にあまりなじめず、プロセスを重視する日本の開発支援に興味を持つようになりました。そのため、日本で国際保健のプロジェクトを多く持っている国際医療協力局で勉強したいと思い応募しました。入職後は、ボリビア、カンボジア、ラオス、ベトナム等多くの国へ短期専門家として派遣され、母子保健や保健システムに関わる活動に従事しました。



新生児ケア研修@ボリビア



新生児短期専門家@カンボジア

その後、2015年から3年間、ザンビアのJICAプロジェクトの長期専門家として派遣となり、ユニバーサルヘルスカバレッジを推し進めるために、地域レベルの保健計画のマネージメント強化を支援しました。プロジェクトでは、結核、非感染性疾患、母子保健の多様な保健サービスに加えて、医薬品供給・医療器材整備・医療情報管理・保健財政等の保健システムに関わる支援を幅広く行い、アフリカにおける開発の課題や解決方法、政治的駆け引きやプロジェクトの運営など、保健医療開発に必要な様々な現場経験を積むことができました。ザンビアでは沢山の失敗をしましたが、政府・NGO関係者を含めて開発に関わる様々な方々と出会い乗り越えることができたことが、私にとってかけがえのない経験となりました。



ザンビア長期専門家@ザンビア

ザンビアから帰国後、今度は2019年から1年間、厚生労働省国際課へ出向となり、WHOを中心とした国際保健ガバナンスにおいて、日本政府の立場をまとめて調整する役割を担いました。ザンビアの現場からいきなりハイレベルの国際政治の世界に戸惑いましたが、世界ではどのような組織が国際保健を動かしていて、現場にどう影響しているかを俯瞰することができました。

また、在任中ちょうどコロナウイルスの世界的流行が始まり、国内外でWHOの役割について注目されるようになりました。コロナに係るWHOとの情報交換や健康危機対応の教訓に基づくWHOの機能強化の方向性について各加盟国代表との議論に参加するなど、コロナをきっかけとして急激に変革してゆく国際保健ガバナンスの変革を見ることが出来たことは、ダイナミックで興味深い経験でした。



国際会議発言中@スイス

—— 今後の展望や夢を教えてください。

世界における保健に関する格差を少しでも是正したいという思いで仕事をしています。ザンビアの経験から、遠方から現場で起こっていることを十分に理解することはとても難しいと実感しましたので、なるべく現地の方々に近いところで仕事をしたいと思っています。国際協力におけるニーズや課題・解決方法は、常に現地の価値観を踏まえた相対的なものです。そのために実際の空気に触れ匂いを嗅ぎ生活をして、できる限り現場の状況きちんと理解することが重要と思っていますし、この過程で新たな学びを発見できることが、私にとって最も楽しいことです。また、現場で起こっていることを、学術的にまとめて発信していくことも重要を思っています。今まだ論文は少ないですが、今後積極的に発信していきたいと思っています。

—— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際保健の分野はとても幅広いので、どの分野が自分に向いているか国際保健の様々な現場を経験すると良いと思います。JICAのような2国間援助機関、大学を中心とした学術機関に加えて、私は国際機関やNGOで働いたことはありませんが、そういった場所でも働けると、様々な角度から国際保健を考えることが出来るのではないかと思います。また、近年デジタルヘルスの分野の技術開発が著しいので、これらのイノベーションを推進する企業の役割も注目しています。

私は、これまでの経験から国際保健では、色々な方々がそれぞれの立場で活躍されていることを学びました。どんな場所でどんな人がどんな価値観で働いているか実際に体験して、自分に合った国際医療協力のやり方を模索するのが重要だと思います。国際医療協力は、全く価値観の異なった人々と仕事をするといった難しさもありますが、その分とてもクリエイティブでダイナミックなやりがいのある分野です。将来一緒に働くことを楽しみにしています。



—— ありがとうございました。